

## 刊行再開にあたって

「東京大学海洋研究所国際沿岸海洋研究センター研究報告（以下、本誌）」は、平成23年（2011年）の大震災以降休刊していたが、このたび約8年ぶりに刊行を再開することとなった。刊行再開にあたり、以下に本誌の歴史と休刊に至る経緯を簡単に説明し、本誌がこれから果たすべき役割について述べたい。

本誌は、東京大学海洋研究所（現、大気海洋研究所）大槌臨海研究センター（現、国際沿岸海洋研究センター、以下沿岸センター）が設立された昭和48年（1973年）の翌年、昭和49年に発刊された。ただし第1号は、「大槌湾環境調査報告（昭和47年・48年）」というタイトルで発行されている。昭和51年に発行された第2号からは「大槌臨海センター報告」として、平成22年（2010年）まで原則として毎年1回発行されてきた。沿岸センターで行われた研究活動の成果を紹介することを目的とし、原著論文、総説、共同利用研究集会講演要旨、各種観測の結果、国際沿岸海洋センター研究業績一覧などを掲載している。平成11年に発行された第24号からは「Otsuchi Marine Science」と名称を変え、英語の論文も掲載するようになった。さらに平成15年には、和文誌「大槌臨海センター研究報告」と英文誌「Otsuchi Marine Science」に分割して発行されるようになり、翌平成16年には組織改編による沿岸センターの名称変更（国際沿岸海洋研究センターとなる）に伴って、和文誌は「国際沿岸海洋研究センター研究報告」に、英文誌は「Coastal Marine Science」にそれぞれ名称を変えて刊行されてきた。

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波は、沿岸センター研究棟（3階建て）の3階の窓にまで到達し、共同研究員宿舍などその他の建物も含めてすべての研究施設が壊滅的な被害を受けた。しかしながら、震災から2カ月後の5月には、津波による倒壊を免れた研究棟の3階部分のみを改修して研究活動を再開した。その後の経緯については本誌に収録した詳細な記事（震災から新研究実験棟・宿舍棟開所までの記録）を参照されたいが、被災から7年後の本年（平成30年）2月末に、従来と同じ大槌町赤浜地区内の少し山側の住宅地に隣接した高台に研究棟と宿泊棟が再建された（写真）。今年度中には旧敷地内に水槽実験施設が再建され、研究成果の発信と交流を目的とした展示資料館「海の勉強室」が開設される予定となっている。

被災前年の平成22年に発行された第35号以降、本誌は休刊となっていたが、その間に図らずも本誌の存在価値や今後果たすべき役割が浮き彫りになったと言える。今回の大地震と大津波は、三陸・常磐沿岸地域の人間社会のみならず、海洋生態系やそこに棲む生物たちに大きな攪乱をもたらした。地震や津波によって海洋生態系がどのような影響を受け、今後どのように変化していくのかを明らかにすることは、近代海洋科学が初めて直面する課題であるばかりでなく、被災地域の沿岸漁業の復興と発展にとっても不可欠な過程である。沿岸センターには、2012年4月に新たな研究室「生物資源再生分野」が設置され、この研究室を核に文部科学省の大型研究プロジェクト「東北マリンサイエンス拠点形成事業－海洋生態系の調査研究－」など、津波の影響研究の重要な研究拠点の1つとして機能している。震災の影響を明らかにするためには、震災以前の情報が不可欠であるが、昭和48年に設立された沿岸センターでは、教職員・学生はもとより全国共同利用・共同研究拠点として訪れる国内外の様々な分野の海洋研究者が研究を行ってきた。したがって沿岸センターには、震災以前の40年以上に及ぶ研究による大槌湾内外の海洋環境や生物についての多くのデータが蓄積されている。本誌には、大槌湾をはじめ三陸沿岸で行われた多くの研究成果が論文としても収められているが、同時に通常の科学論文には掲載されない水温や塩分など長期的な環境データも掲載されている。初期の号には、大槌湾に生息する動植物の目録なども収録されている。これら本誌に記録されていた震災以前の様々な情報は、震災後の状態と比較しうる記録として大変重要な役目を果たした。長期的なモニタリングの重要性とともに、モニタリングの結果など論文にはなりにくい観測結果や記事を掲載する本誌のような出版物の重要性が改めて証明されたと考える。

8年ぶりに発行することになった本号には、沿岸センターの被災の詳細と復興への道のりについての記録、および被災した教職員や学生、来所していた共同利用研究者らによる被災の回想を掲載するとともに、被災から現在までに学内外の広報誌等に掲載された沿岸センターの関連記事を転載した。さらには、東北マリンサイエンス拠点形成事業による研究成果の一部を取りまとめた東日本大震災特集論文集（5報）を収録した。また、英文誌Coastal Marine Scienceに掲載された東日本大震災特集論文集（7報）の和文タイトル、本誌の休刊中に発行されたCoastal Marine Scienceの収録論文の英文要旨も掲載した。

沿岸海洋研究における沿岸センターの役割は、被災によってこれまで以上に大きくなったと言えるだろう。今後、大槌湾にはさらに多くの研究努力が投入され、沿岸センターは地震と津波の影響やその後の回復過程の研究拠点として機能する使命を負うこととなる。震災以降に三陸の海で起きている事象の詳細な科学的記録は、将来的に地球上のどこかで起こる同様の災害への備えや復興に重要な示唆を与える人類の共通財産となるだろう。本誌は、それらの重要な記録を後世に残すための媒体として、これからも重要な役割を果たすものと確信している。

平成30年6月

国際沿岸海洋研究センター研究報告 編集委員長 河村知彦



研究実験棟・宿舎棟外観（撮影 菊地眞悟）



研究実験棟エントランス（撮影 山本祐之）



宿舎棟エントランス（撮影 山本祐之）



現代アート作家大小島真木氏により研究実験棟エントランスホールに描かれた天井画（撮影 山本祐之）